天理参考館から（33）

# 源氏物語にまつわる一考察 ―高貴な女性の行為の結末―

天理参考館学芸員
幡鎌　真理 *Mari Hatakama*

天理図書館開館 93 周年記念展「源氏物語展―珠玉の三十三選―」が、10 月 18 日（水）から 11 月 27 日（月）まで、天理参考館 3 階企画展示室において開催されている。紫式部が平安時代に書き下ろした典雅な物語は、時代を超えて脈々と読み継がれ、わが国で最も有名な文学作品の一つと言える。この作品が文学だけでなく、あらゆるジャンルの日本文化に与えた影響は計り知れない。印刷技術が生み出されるまで、古典籍は人の手によって書き写されてきた。読みたいと思う人が多いからこそたくさんの写本が生まれたのである。現時点で平安時代の『源氏物語』の伝本は確認されておらず、鎌倉時代のものが最古の写しとされている。

そのうちの一つ、天理図書館蔵『源氏物語』国冬本が今年 6 月 27 日付で国の重要文化財に指定された。これは、鎌倉末期成立の 12 冊と、室町末期に補われた後補 42 冊から成るもので、住吉神社神官で歌人としても名高い津守国冬（1270 ～ 1320）の筆と伝えられている。国冬は摂津守にまで上りつめ、兵庫嶋などの関所の徴税権を巡って東大寺と争論に及んだ、なかなかに意気盛んな人物だが、この本は匂い立つように優美である。表紙は枡目ごとに花鳥を織り出した緞子で彩られ、各冊それぞれに色を変えた誠に美しい装幀になっている。期間中展示されるので、この機会にぜひご覧いただきたい。これらが収められた豪華な蒔絵箱に描かれているのは、光源氏が幼い若紫を垣間見ている有名な場面である。これに関連して、高貴な姫君の振る舞いの、当時としては型破りな行動について言及したい。

紹介したいのは二つの場面（ともに展示№ 21『源氏物語奈良絵本』参照）である。先に述べた北山の僧坊で光源氏が幼い紫の上を初めて垣間見る「若紫」と、柏木が御簾から姿を現した女三宮を目で捉える「若菜上」である。どちらも出会った瞬間に恋に落ちた、とてもドラマティックで有名なシーンだが、その姫君二人の登場の仕方が当時としてはとてもセンセーショナルなのだ。紫の上は「十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などの、なえたる着て走り来る女子」として光源氏の前に現れ、「あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生い先見えてうつくしげなる容貌なり」と、瞬時に彼の心をつかむ。しかし、貴族の姫君が、十歳にもなって「走ってくる」ことは当時としては考えられない。「立ち居振る舞い」というごとく、必要なときは静かに立って、それ以外はおとなしやかにその場に居るものだった。移動が必要な場合は、侍女の女房たちに脇を抱えられるように静かに歩を進める。庶民であっても「走る」ことは異常な行動と見なされ、異界に行ってしまうのではないかとそれを見た人々が恐れおののく、そういう時代である。親代わりの尼が嘆いたのは、犬君が逃がしてしまった雀のことで騒ぎ立てることも含め、紫の上の貴族の姫としての振る舞い全般だったろう。「後ろ盾もなく、年老いた尼が育てた姫などやはりねぇ…」と思われることを尼は恐れた。良いお相手の殿方は現れまい、と。

ある種「不用意な」行動を取る最上流の女性のもう一方が、光源氏の正妻となる女三宮である。若菜巻は『源氏物語』54 巻中で最も長いため、唯一「若菜上」「若菜下」と上下に分かれている。紫式部も、特別の思いを込めて筆を進めたのではないか。ここで登場する女三宮は、光源氏の兄である朱雀帝の三番目の娘で、当時最高級の女性である。しかしいざ結婚してみると、彼女は気配りに欠け、文章は幼稚で、思ったそのままを口にする無邪気なだけの少女だった。光源氏はひどく失望する。最愛の紫の上を傷つけてまで手に入れたい女性であったのか、と。光源氏の邸宅六条院で蹴鞠の会が催されたある日、夕霧や名足（蹴鞠では名手ではなく、名足と称する）の柏木が華麗な足さばきを見せていた。そのとき、猫が室内から走り出たために、猫の紐が御簾に引っかかってまくれ上がり、あろうことか庭から室内が丸見えになってしまう。その場に無防備に立っていたのが女三宮その人である。柏木も求婚していたが得られなかったその憧れの女性の姿を、白日の下に目にした柏木は胸を震わせる。室内があらわになったことにまだ気づかない女房たちに夕霧は咳払いで警告し、ようやく女三宮も奥に退いた。当時、上流の女性が夫や親兄弟以外に顔を見せることは、あってはならない恥ずべきことだった。御簾のそばまで出て来てぼんやり立っているのではなく、常々光源氏に言い含められていたように奥で静かに過ごしているべきだったのである。女三宮の周囲で仕える女房たちは、蹴鞠見物に夢中になって、室内が丸見えになったことにも気づかないような、今日言うところの「危機管理能力に欠ける」者ばかりだった。このように常識に欠けた最上流の姫君の行動が、女三宮自身をこの後悲劇へと導いていく。

天理図書館開館 93 周年記念展
「源氏物語展―珠玉の三十三選―」チラシ

紫の上にとっても、「若紫」での振る舞いが光源氏と出会う好機となったものの、「若菜」での女三宮の振る舞いによって結局全て禍に転じてしまう恐ろしさを見せつける物語の展開である。紫式部の伏線であろうか。現在伝わる 54 巻それぞれの名称は、紫式部自身がつけたとする説と、後世のものとする説が存在する。作者自身がつけたかどうかについて、直接肯定ないし否定する証拠は見つかっていないらしい。いずれにせよ、このなかで「若」が付く巻名はこの 2 つしかない。紫の上と女三宮という高貴な女性の「若気の至り」の振る舞いが、光源氏を挟んで対峙する興味深い巻と言える。

これらを頭の片隅に置いて、展示室で美しい源氏絵を鑑賞していただきたい。併せて、「若菜上」の、細身で精悍な、いかにもやんちゃそうに描かれている唐猫にもご注目ください。